

随筆

中国駐在記

後藤孝志

1. はじめに

私は2018年12月から2023年5月までの約4年半、中国湖北省荊州市に電動パワーステアリング（以下EPS）製品で初めて設立した合弁会社の湖北恒隆凱迺必汽車電動轉向系統有限公司/Hubei Henglong & KYB Automobile Electric Steering System Co., Ltd.（以下HKKE）に赴任した。前年2017年の設立から関わっており、延べ6年以上に及ぶ業務であった。

異国の文化、マイノリティ拠点での難しさ、初のEPS海外生産、新型コロナ（以下コロナ）対応等、色々な意味で貴重な体験することができたので、一部を紹介する。

2. 荊州市の紹介

コロナが最初に発見された場所である武漢市から約300km西に位置し、三国志で有名な関羽が拠点としていた街である。外周10kmの堀に囲まれ、荊州古城として残っており、高さ50mを超える像が聳え立っていた。しかし、違法建築ということで2021年に撤去されてしまった（写真1）。

また三国志以前では漫画キングダムに登場する春秋戦国時代の大国の一つであった楚の拠点でもあり、楚王の遺跡は一見の価値がある（写真2）。

今日では沿岸地域と比較して発展していないものの紀元前からの遺跡も多く、歴史が深い街である。



写真1 57.3mの関羽像

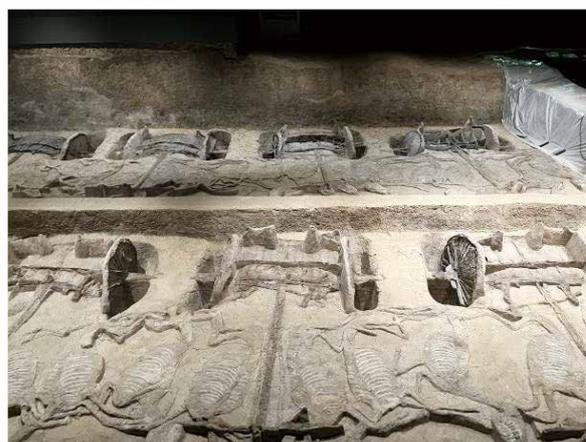


写真2 楚王の遺跡

人口は600万人以上いるが外国人は僅か10数人で、中国人でも上海等の大都市の方は名前も知らないことが多い。そんな田舎の街であるが外国人慣れしておらず、飲食店に行けば珍しいとのことで歓迎されることが多い。日本食レストランもあるが現地人向けにアレンジされており、期待する日本料理はまず食べられなかった。

中国で最大河川の揚子江（長江）が街中心に流れ、タンカー等の大型船の運航もできる。世界最大の三峡ダムのある宜昌市とも隣接している。2020年に豪雨による三峡ダム決壊危機のニュースが日本で話題になり、現地でも街中心部が洪水で水に浸かる等の被害は出たが、ダム決壊の心配はなかった（写真3）。

毎年マラソン大会も開催され、街の一大イベントになっている。参加者は2万人以上、コース沿いには多数の地元民が銅鑼を鳴らし、学生達からも応援の音が掛けられる。2019年と2023年の2回にハーフマラソンに参加できたことは良い経験となった（写真4）。



写真3 揚子江（長江）の砂浜



写真4 荆州市マラソン大会

3. 会社稼働開始、新工場設立とコロナ影響

2018年11月から新会社の稼働が開始した。団結力を高めるために、課外活動行事等もたくさん催され部署間の交流が多かった（写真5、6）。

翌2019年9月に新工場に引越しとなった。この時は駐在員・現地従業員が一致団結した大きな活動にもなった（写真7）。



写真5 課外活動



写真6 バスケットボール大会



写真7 新会社引越し時の昼食

2020年1月末にコロナが蔓延、武漢市近隣でもあり、交通が遮断されると情報もあったため、ロックダウンが始まる2日前に日本に帰国した。当初はコロナも数週間程度で収束し、直ぐに中国に戻れると安易に考えていたが、影響は全世界規模となり、中国に戻る目途が全く立たなかった。この時の駐在員全9名は、一緒に戻ることは叶わず、4回に分けて戻ることになった。私は第1陣として2020年7月に関西空港よりチャーター便で武漢に到着、その後2週間は武漢のホテル、もう2週間は荊州の自宅で、計28日の隔離生活を送った。武漢での隔離生活は近くのAEONから日本食が配達されたが、荊州市にある日本食レストランよりも遥かに美味しい日本食を食べることができたことは驚きであった。

駐在員全員が戻ったのは2020年11月で、戻るまでの期間はメール/Web会議でのやり取りがメインとなりコミュニケーションも段々悪くなり、またコロナ影響により中国国内で混乱が継続、合弁会社の業績も良くなく、駐在員と現地中国人との間に溝が生まれだした。当時はマイノリティ拠点かつ中国合弁先会社の既存ビジネスしか仕事がなく、新規受注も進まなかったこともあり、意見・文化の違いで、双方の対立も多くなった時期でもあった。

また、マンションでコロナ患者が発生するとマンション全体・街のある区画が隔離となり、一般生活でも色々な苦勞が多かった。

4. 中国での業務

私は開発部（設計部）に所属し、カヤバ主力製品の2ピニオンEPSの拡販や、合弁先企業の主力製品であるコラムEPSの減速機部にカヤバ技術の展開と改善を主に担当した。

設立当初は、カヤバと合弁の強みを生かしたプレゼンテーションを、中国の国内OEM・サプライヤー何十社にも行った。合弁会社が稼働して1年、これからビジネス拡大を模索していた矢先、コロナが直撃して長い苦勞の期間が続く。

それでも2ピニオンEPSの初量産を立ち上げることができた。この製品はインド大手OEMに採用され、車両はその年のインドカーオブザイヤーにも選出された。1st車両のラインオフを祝うイベント（写真8）に参加させて頂き、HKEの技術力をアピールできたことは大きかった。

本量産品が立上り後、中国車両メーカー（以下OEM）向けにも2ピニオンEPSの受注が拡大、コラムEPSと合わせ年間生産数は100万台を超えた。一方、中国の開発スピードは速く、量産品でも1年、あるいは半年での立上げが必要になる時もあった。



写真8 ラインオフ祝勝会

5. 中国の食べ物、旅行

荊州市は内陸に位置しており、料理の味付けは辛いことが多い。また、中国特有のお酒である“白酒”を好む方が多い。大人数で食事をする際は回転テーブルを囲み、白酒で乾杯する（写真9）。乾杯には注意が必要で自分のペースで飲むのは基本ご法度、乾杯しながら飲む必要がある。白酒はアルコール度数が高く、飲み方には注意が必要だ。しかし酒を飲み交わすことで距離が縮まるのも事実である。

国土が広い中国は地域毎に色々な料理があるが、その中でも麺は面白い。イスラム文化と融合した料理もあり、日本人にもあう麺料理も多い。その中でも大連麺という荊州市発祥といわれる麺が、あっさりして美味しい（写真10）。中国では麺料理は朝食や昼食で食べることが多く、平日は会社地近くの食堂、休日の朝はアパートの近くへ良く食べに行った。また、豚肉よりも羊肉の方が一般的に多く食べられていて、会社の宴会では羊の丸焼きが出ることもあった（写真11）。

荊州市ではザリガニが有名料理の一つである（写真12）。味はエビに近く、普通に美味しい。また、ザリガニ料理を注文すると、ビールが飲み放題となる。

アルコールを含む飲料類は常温で出される場合が多く、冷えたビールを販売する店を把握したり、次から準備して欲しいと依頼することが大事である。



写真9 円卓



写真10 大連麺

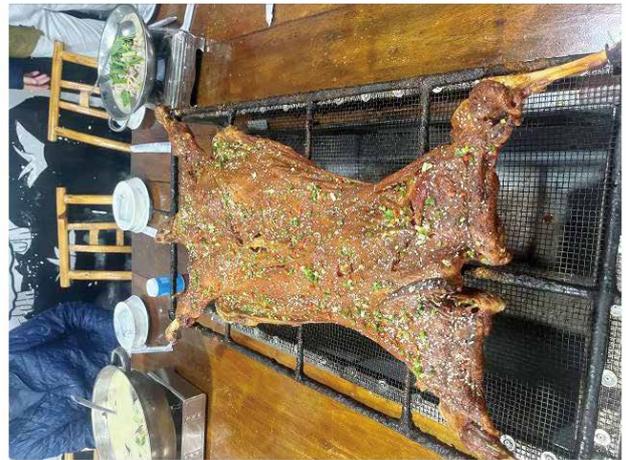


写真11 羊の丸焼き



写真12 蒸したザリガニ料理

コロナ影響で中国は毎日PCR検査が必要、陰性証明書は各都市で証明アプリも違うなど、外国人の旅行について厳しい時期が続いた。せっかくの赴任も行動制限されてなかなか移動できなかったため、自転車を購入した。地元のチームにも所属し、1日100km以上を仲間と走ったり（写真13）、キャンプしたりと趣味が増えたことは意外であった（写真14）。



写真13 荆州市自転車チーム



写真14 揚子江でのキャンプ

コロナ影響でも旅行はできたが限定的で、秦の始皇帝の墓である兵馬俑は行けたが、それっきり遠出の観光はできなかった。

2022年12月になると中国全土で一気にコロナ患者が激増、私もコロナになり42度の高温がでた。ただ、その後は行動制限が完全に撤廃された。2023年1月～5月の間は連休や休日を利用し、できる限り色々な観光地を回った。アバターのモデルになった武陵源、西安のパンダ、敦煌のシルクロード遺跡、万里の長城、チベット等が観光できたことは本当に良い経験になった。その中で一番感動したのはチベットである。ここは自治区であり、入域許可証が必要となる。コロナ影響で外国人に入域許可証は発行されていなかったが、帰任直前の2023年4月から入域可能となり、5月の労働節に訪れることができた。

チベット自治区の区都ラサは標高4,000m弱で街中心が富士山級の標高(写真15)である。初日は何ともなかったが2日目以降は高山病にかかり、頭痛が収まらなかった。高山病の薬や、酸素の吸引もあまり効果がなかった。

しかしチベット仏教や世界一高い場所にあるポタラ宮殿(写真16)、壮大な自然(写真17)は圧巻であり、感動の連続であった。



写真15 標高5190m地点、ヒマラヤ近く

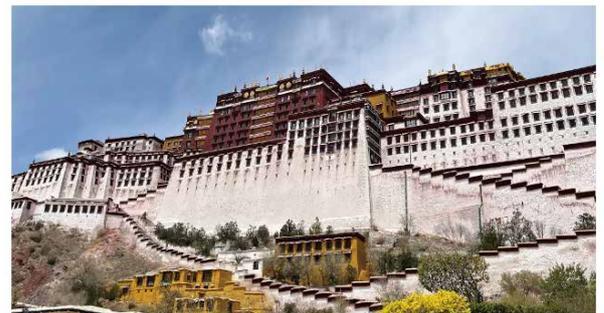


写真16 ポタラ宮殿



写真17 幻想的な空と湖

6. おわりに

終わってみれば、あっという間の4年半でした。色々な苦労もありましたが、経験したことを活かし、今後も会社に貢献していきたいと思えます。

駐在中にお世話になった方々にはお礼を申し上げますと共に、HKEの更なるご発展とご飛躍を心よりお祈り申し上げます(写真18, 19)。

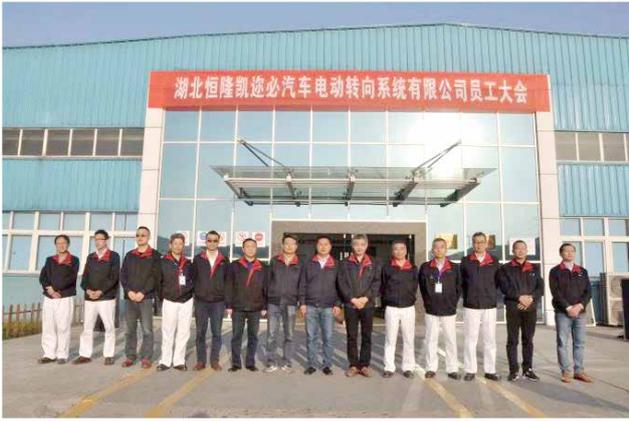


写真18 新会社設立時の記念撮影



写真19 帰任時の記念撮影

著者



後藤 孝志

営業本部 グローバルビジネスユニット 海外営業部 専任課長。ステアリング技術部，商品企画部，経営企画部，HKEを経て，現職